
狼の赤い寄り道

餛飩粉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼の赤い寄り道

【Nコード】

N8530Z

【作者名】

餛飩粉

【あらすじ】

群れからはぐれた狼が、やがて辿り着いた森の中で赤い頭巾を被った少女に出会う。狼の中で湧き上がる感情とは一体何なのか。少女から受け取った赤い実は何なのか。一人と一匹はどうなるのか。

童話の赤ずきんから着想を得た完全オリジナルの短編小説です。

非常に短い作品ですが連載と言う形を取らせていただきますが、本当にあつという間の作品ですので暇なときにパパーッと読んでいただければ幸いです。

一匹の狼

一匹の狼が平原を宛もなくさまよっている。灰色の毛並みを持つ、大きいとはいえない体躯の狼。

狼は、配偶者を見つけるために群れを出て行ったわけではない。目覚めたら群れからはぐれていて、ただっ広い平原に一匹で横たわっていたのだ。

平原は、群れで暮らしていたときより一層大きく感じた。群れの仲間や家族を探そうとしたが、自分の鼻が感じ取るにおいの判別に自信がなかった。

狼はまだ生まれてから二年ほどしか経っていないため、見た目こそ成熟しているが、狩りをした経験もない。

暗くなり始めた空に向かつて、生まれたときから覚えている遠吠えを何度も繰り返したが、返事は来なかった。時間だけが過ぎていき、やがて狼は眠りに落ちた。雑草の枕は、母親の腹とは違って冷たかった。毛並みの様に生えているのに、そこには体温がない。

次の日は、銃声の音で目が覚めた。飛び退くように身を起こして首を左右に振ると、少し遠くの方に鹿が一頭、それも全速力で走っている。

そのすぐ後ろに、人間がいた。狩猟者だ。今しがた発砲した銃に弾を装填している最中だった。狼の存在には、まだ気づいていないようだった。狼は慎重な足取りで人間から距離を取っていき、一瞬で踵を返した。体力のことも考えず、四本の足を全力で動かす。そうして走っているうちに狩猟者に対する恐怖は消え、気分も晴れやかになってきた。心なしか空に浮かぶ太陽が祝福しているようだった。群れで暮らしていたときは、こんな爽快な気分を味わったことなどなかった。

狼は知らず知らずのうちに、走ることの喜びを覚えた。地面を叩く四本の足、風を受けて横一線になる体毛、己の内側から疾走を鼓舞するかのように脈打つ心臓。全身が一つの塊になって、駆けてゆく。何処までも、何処までも。

そんな喜びの最中、狼は無意識のうちに獲物を探していた。首を動かし、過ぎ去っていく風景の中に腹を満たす餌を求めながら、走っていた。そして、両目が遠くで草を食べている鹿を捉えた瞬間、自然と動きを止め、姿勢を低くして身構えた。

見覚えのある鹿だ。先ほど狩人に追われ逃げ回っていたあの鹿は、群れからはぐれたのだろうか一匹で草を口に含んでいた。それほど大きくはないが、あの一匹で一週間以上は何も食べずに済む量だ。狼にとって、初めて狩りだ。それも群れで行うものではなく、孤独な狩りである。同時に、孤独な鹿を見るのも初めてだった。

まずは餌を食べている鹿に気づかれないように、ゆっくりと前進する。死角である真後ろに来るまでに、そう時間はかからなかった。周囲は平で身を隠すものはなく、距離は貪るほどある。

今気づかれたら確実に逃してしまふであろう、絶妙にもどかしい道のりを、狼は貪るのではなく少しずつ咀嚼していった。草食動物が草や葉を口の中で時間をかけて磨り潰すように、ゆっくりと歩を刻む。

近づいていくうちに、狼はその鹿の異変に気がついた。鹿から血の臭いが漂っている。よく見ると獲物の左後ろ足に血の痕　いや、今も血が流れている。

狼は狩りの成功を確信した。それは油断だった。急ごうとする前足の爪が、小石と擦れて音を立ててしまった。

鹿の耳はそれを聞き逃さなかった。すぐさま食事を中断し、辺りを見渡した。振り返ったわけではないのに、真後ろにいたはずの狼の存在を捉えるや否やあつという間にその場から駆け出した。

遅れて、狼も後を追った。獲物に飢えた両目を頼りに、しつこく鹿の背後に食らいつく。

鹿は平原を右へ左へと走り、狼を撒こうとする。だが、足の傷のせいか、あまり速度が出ていない。狼は標的へと迫っていることを感じながらも、その足を緩めようとはしなかった。

そして、飛び掛った。涎を撒き散らしながら顎を大きく開き、鹿の背に噛り付く。牙が肉に食い込み、久しぶりの血の味が舌に広がった。

鹿がバランスを崩して転倒する。狼もつられる様に地面に叩きつけられ、口が離れてしまったが、すぐに立ち上がった。鹿が起き上がる前に首筋を噛み、皮ごと肉を食い千切る。血が勢いよく噴き出し、後は小便の様に垂れた。鹿はもう動かない。狼は首筋から身体の方へと口を進めた。

腹が一杯になる頃には、鹿の原型は頭と足の先ぐらいしか残らなかった。

狼は満腹感と初めての狩りの成功に興奮していたが、その喜びを分かち合う仲間は何処にもいない。寂しさを紛らわすかの様に狼は吠えた。自分がいた群れでなくてもいい。狼は他の狼に、仲間会いたかった。

しかし、反応はない。こんな時、どうすればいいのかわからなくて、狼はまた歩き出した。

しばらくして昨日と同じように、冷えた雑草にその身を委ねた。

頭巾の少女

放浪は何日も続いた。狼は最初の狩り以来、失敗を重ねていた。怪我をしていない獲物達は想像以上に足が速く、持久力も兼ね備えていた。

そろそろ空腹に身体が音を上げようかというとき、別の狼の群れに出会った。しかし、その群れは狼を受け入れてはくれなかった。配偶者を探すには若過ぎたし、群れは群れ以外の狼を好まない。いわば狩りの競争相手のようなものだからだ。

一度、狩猟者にも遭遇した。群れで暮らしていた時も何度か襲われることはあったが、狼には共に逃げる仲間も家族もない。鹿のように平原を大きく蛇行し弾をかわし続けていくしかなかった。狼自身、それを情けないと感じていが、狩猟者相手ではそうする以外に生き残る術がない。

恐怖と冷たさで浅い眠りを繰り返すばかりの日々に足取りは重くなり、獲物を見つけてもそのまま無視してしまうことさえあった。ふと狩りに挑戦しても、近づく前に逃げられてしまうこともあった。それでも、狼は生き延びようとした。

空腹を堪えながら、地平線を目指した。

群れの仲間に会いたかった。

家族に会いたかった。

もう一度あのにおいを嗅ぎたかった。

あの温もりに顔をうずめたかった。

体力が限界に達する直前、平原の最果てに辿りついた。

狼の前に、鬱蒼と木々や草花が生い茂る森林が広がる。狼は思わず後ずさりして、その森林を眺めた。平原にも時折木が伸びていたりするところもあったが、目の前の森は足の踏み場もないほどにそれが密集している。身の丈と同じくらいまで伸びている草花が、地

面を覆っていた。

しかし、狼が感じたのは恐怖ではなかった。

自信はなかったが、森の奥からどこか懐かしいにおいを嗅ぎ取ったからだ。

本能が、何かの気配を感じていた。

目を凝らすと、ずっと先に奇妙な木が一本生えているのが見えた。平原では見たことのない木であったのもそうだが、どうやらその周囲だけ平たい地面になっているようだ。しかし一番狼の興味を引いたのは、幾つかの木の枝から、丸い物体がぶら下がっていることだった。見るからに瑞々しいそれは丁度口にくわれそうで、獲物同様、不思議な魅力で狼の食欲を掻き立てた。狼には、それがどくどくと滴る血が凝縮したもののように見えた。

狼は草木を分けて、森の中へと入った。なんとか木の前まで辿り着くも、その物体は飛び上がったも寸でのところでは届かない位置にぶら下がっていた。魅力を振りまくだけ振りまいて、決して触れさせない。他の獲物と同じく、赤い物体は狼を見下ろしていた。

何度も跳躍しているうちに、木の根に足を取られてた。転倒した狼は自分のしていることの愚かしさに気づいているのかいないのか、それでも跳び続けた。

どこか、懐かしいのだ。それが何であるのか、決めようにも狼は自信がない。そんな曖昧な希望が、どうしてか狼を動かすのだ。

しばらくして、草の擦れる音がした。狼のものではない。こちらに近づいてくると悟った時、狼は音のする方と反対方向の草木の陰に身を隠した。

息を潜めて様子を窺っていると、向こうから人間の少女が少女が現れた。年は十歳前後、フリルのついたブラウスに、白い前掛けを下ろした茶色のスカート。そして何よりも特徴的なのが、少女の頭をすっぽりと覆っている赤い頭巾だった。まだあどけない頭巾の少女は、手に身の丈以上の長い棒を持ち、木製の編みこまれた籠を肘に掛けていた。

少女は、木の根を兎のように飛び越えて物体をぶら下げる木の前までやってきた。籠を根元に置こうと身を屈めた少女の頭部は、狼の位置からは頭巾しか見えなくなる。枝に実っている物体にそっくりだと、狼は感じた。

少女は長い棒を両手に持ち替え、赤い物体に向けて伸ばした。バランズを取りながら、少女はもう棒の先端で物体を突き揺らす。叩く度にゆらゆら揺れて、棒を当てていくほどそれは大きくなった。そして、一回転しようかというところで物体が枝から離れた。重力に従って落下したそれを、少女は拾い上げて籠に入れる。それを何度か繰り返し、小さな籠が一杯になるまで彼女は採り続けた。

一杯になった籠を見ると、少女は満足そうにその場を去ろうと元来た茂みの中へ入っていった。

同時に、狼もまた動いた。足元にあった枝を踏みつけて、わざと大きな音を立てる。

少女がはつとなつて振り向く。視線が交差し、森の隙間を縫った風が、狼の毛並を、少女の茶色い前髪を揺らした。

しばらく、葉の擦れ合う音だけが響いた。

狼は、途端にどうするべきか迷った。今はとてつもなく空腹で、目の前にいる少女は肉だ。少女の持つ赤い物体は何だ？ 食べるのか？ 満たされるのか？ どちらにしろ食べてみたい。

赤い頭巾の少女は狼を見て驚いたようだったが、逃げようとはしなかった。むしろ、茂みの中から顔だけを出した狼に近づいていく。狼は狼狽したが、心臓が激しく脈を打つのに対して身体はぴくりとも動いてくれない。今自分を支配しているのは、少なくとも恐怖ではないはずなのに。

得体の知れない、全身が総毛立つような何かが狼に自由を与えてはくれなかった。少なくとも、少女がいなければこんなことにはならなかっただろう。

少女はしゃがんで、狼と目線の位置を合わせた。そして籠に積まれた物体を一つ取り出すとそれを狼の前に置いた。そして、につこ

りと微笑んだ。

狼にはそれが何を意味しているのか理解できなかった。息を荒くしながら、目の前に置かれた物体と少女の笑顔を交互に見やる。

伸ばした舌から涎が垂れ落ちた。次の瞬間には、何のためらいもなくそれに齧りついた。肉よりも硬い食感で、血よりもずっと甘い汁が口の中に広がった。中には一際硬い部分もあって、食べられそうにない箇所もあったが、その部分を残してあつという間に平らげてしまった。

少女は狼の食事を見届けると、今度こそ森の中へと消えていった。狼はそれを追いかけなかった。追いかけようとしたのだが、また身体が奇妙な感覚に支配されたのだ。これは懐かしさか、真新しさか、それとも別の何かなのか。

狼は自らの内に芽生えた何かの正体がわからなかった。

唯一、口の中の後味だけがはつきりと残っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8530z/>

狼の赤い寄り道

2011年12月26日22時54分発行